

はじめに

『古今著聞集』は、一二五四年に成立した説話集である。本書は橘成季（生没年不明）によつて編集された。収録されている各説話は、神祇・釈教・政道忠臣・公事・文学・和歌・管絃歌舞・能書・術道・孝行恩愛・好色・武勇・弓箭・馬芸・相撲強力・画図・蹴鞠・博奕・偷盜・祝言・哀傷・遊覧・宿執・闘諍・興言利口・怪異・変化・飲食・草木・魚虫禽獸の三十篇に分類されている（新潮日本古典集成の表記による）。またそれぞれの篇において各説話が年代順に配列されるなど、いわば百科事典的な様式がとられていることが特徴である。

そのような『古今著聞集』巻第十一には、蹴鞠関連の説話が九つ収録されている。その九つの説話の中で特に圧巻なのは、四一〇話の「侍従大納言成通の鞠は凡夫の業に非ざる事」である。この説話は、鞠の名足（鞠の名人）である藤原成通の逸話を述べたものであり、全部で八つのエピソードから成る大作となつてゐる。

この四一〇話の冒頭には、「鞠の性」が登場する場面がある。「性」は「精」のことであり、「蹴鞠の精靈」と解釈することができるだろう。以下、少し長くなるが本説話における「鞠の性」登場場面を引用する（1）。

千日のはての日、引きつくるひて数三百あまりあげて、落ちぬさきにみづから鞠を取りて、棚を二つまうけて、一つの棚には鞠を置き、一つの棚にはやうやうの供祭を色々にすゑて、幣一本をはさみたつ。その幣を取りて鞠を押す。みな座に付き、饗を居ゑて勧盃あり。三獻の後、身の能を各奉る。五獻に事終りて祿を賜ふ。よろしき人には檀紙・薄様、侍の輩には装束を給ふ。事はてて人々出でて後、夜に入りて、その事を記せんとて燈台をちかくよせ、墨をする時、棚に置くところの鞠、前にまろびて落ちきぬ。あやしいうやうありとおもふほどに、顔人にて手足身は猿にて、三四歳なる児ほどなるもの三人、手づからかいて鞠のくくりめをいだきたる。あさましと思ひつつ、「なにものぞ」とあらく問へば、「御鞠の性なり」とこたふ。「昔よりこれほどに御鞠このませ給ふ人、いまだおはしまさず。千日のはてて、さまざまの物給はりて、悦び申さんと思ひ、また身のありさま、御鞠の事をもよくよく申さん料に参りたり。おののおのが名をも知ろしめすべし。これを御覽ぜよ」とて、眉にかかりたる髪を押しあげたれば、一人が額には春楊花といふ字あり、一人がひ

たひに夏安林といふ字あり、一人が額に秋園といふ字あり。文字、金の色なり。かかる銘文を見ていよいよあさましと思ひて、また鞠のたましひに問ふ様、「鞠は常になし。その時住する所ありや」。答へて云はく、「御鞠の時は、かやうに御鞠に付きて候。御鞠の候はぬ時は、柳しげき林、きよき所の木に栖み候ふなり。

御鞠このませ給ふ代は、国さかへ、好き人司なり、福あり、命ながく、病なく、後世までよく候ふなり」といふ。また問ふ様、「国さかへ官まさり、命長く病せず、福あらん事は、さもやあらん。後世までこそあまりなれ」といへば、鞠の性「まことにさもおぼしぬべき事なれど、人の身には一日の中にいくらともなきおもひ、みな罪なり。鞠を好ませ給ふ人は、庭にたたせ給ひぬれば、鞠の事より外に思しめす事なれば、自然に後世の縁となり、功徳すすみ候へば、必ず好ませ給ふべきなり。御鞠の時は各が名をめせば、木つたひ参りて宮仕へはつかまつり候ふなり。但し庭鞠は御好み候ふまじ。木はなれたる宮仕へは術なき事に候。今より後は、さるものありと御心にかけておはしまさば、御まもりとなりまゐらせて、御鞠をもいよいよくなしまゐらせんずるなり」といふほどに、その形見えずなりにけり。これを思ひつづくるに、鞠を請ふには、ヤクワといひ、アリと云ひ、ヲウと云ふ、鞠の性が額の銘文なり。もつともゆゑある事なりとぞ侍るなる。

蹴鞠をこよなく愛する成通は、毎日欠かさず鞠を蹴り続けた。千日目の満願の日に、彼は鞠を棚に祀り饗宴を行う。その後成通は、顔は人で手足は猿という容貌をした三人の児に出会う。彼らの名前は、春楊花、夏安林、秋園である。彼らの正体を成通が問うと「鞠の精霊である」と答える。蹴鞠を好み、千日目の満願を遂げた礼のため、彼の前に現れたのだという。「蹴鞠が行われていない時はどこに住んでいるのか」という問いには、精霊は「柳しげき林、きよき所の木」に住んでいると答えた。蹴鞠が行われることを感じると精霊たちは、「木つたひ参りて宮仕へはつかまつり候ふ」というのである。鞠を請う時の「ヤクワ」「アリ」「ヲウ」というかけ声は、彼らの名前に由来しているのである。そして今後は自分たちの存在を意識しながら蹴鞠に取り組むようにと成通に言い残し、精霊たちは姿を消す、という話である。

ここで着目したいのは、蹴鞠の精霊が普段住んでいるところは「柳しげき林、きよき所の木」という点である。

さらに「木はなれたる宮仕へは術なき」と述べているところからも、蹴鞠の精靈は樹と切つても切れない関係にあるということがわかるだろう。

また、蹴鞠の精靈についての似たような説話は『十訓抄』にも見られる。

成通卿、年ごろ鞠を好み給ひけり。その徳やいたりにけむ、ある年の春、鞠の精、懸りの柳の枝にあらはれて見えけり。みづら給ひたる小兒、一二三ばかりにて、青色の唐装束して、いみじくうつくしげにぞありける。

(『十訓抄』十ノ六十九 新編日本古典文学全集)

長年蹴鞠を好んで行つた成通の徳が極限にまで達したのであろうか、ある年の春に蹴鞠の精靈が、懸の一つであ

る柳の枝に現れた。髪を結った十一、三歳の子どもの姿をしており、青色の唐装束を着て非常に立派な様子であった、という内容である。

『古今著聞集』と比べると非常に簡素な説話であるが、鞠を長年たしなんだ成通が蹴鞠の精霊に出会うという点で、内容はほぼ同じと言つてよいであろう。相違点としては、成通と蹴鞠の精霊による問答は描写されていない点と、精霊の容姿が挙げられる。しかし精霊が「懸りの柳の枝にあらはれて見え」たという点から、やはり蹴鞠の精霊と樹には大きな関係があるといえるだろう。

蹴鞠の精霊についての先行研究は意外にも少ない⁽²⁾。特に樹と結びつけて述べられているものも無くはない⁽³⁾のであるが、「懸が蹴鞠にとつて必須である」ということを述べるための具体例として挙げられているに過ぎず、蹴鞠の精霊そのものについて深く考察しているとは言い難いため、不十分であると思われる。本稿では、樹と大きな関係をもつと考えられる蹴鞠の精霊に焦点を当て、日本に古くから存在する樹靈信仰という観点を中心として考察していきたい。

第一章　日本と中国の蹴鞠文化の違い

第一節　中国蹴鞠の歴史と『鞠城銘』

蹴鞠の精靈と樹靈の関係を考えるにあたって、まずは蹴鞠の歴史を確認しておきたい。『古今著聞集』四〇七話は蹴鞠篇の序にあたる話であるが、ここでは「文武天皇の大宝元年にこの興始まりけるとかや」と述べられて いる。大宝元年は七〇一年であるので、飛鳥時代である。蹴鞠の伝来については様々な説があるようであるが、『うつほ物語』「国譲 中」に蹴鞠の話がある（後に引用する）ため、少なくとも平安時代には日本で蹴鞠が行われていたといえるであろう。

そもそも、蹴鞠は日本で始まつたものではなく、中国が発祥の地であると伝えられている。『古今著聞集』に登

場する「鞠の性」たちの額にはそれぞれ、「春楊花」「夏安林」「秋園」という文字が刻まれているが、これらの名前からほどなく中国の色が見て取れる。さらに、『十訓抄』に登場する「鞠の精」も唐装束を身に付けている。ここからも、蹴鞠と中国の関係が当時から意識されていることが推察されよう。したがって、蹴鞠の原点ともいうべき中国の蹴鞠について、まずは整理する必要がある。この整理によって、日本の蹴鞠独自の文化を洗い出すことが目的である。

中国の蹴鞠については、藩蓄氏の「古代における中日文化交流の一侧面—蹴鞠文化を中心に—」という論文⁽⁴⁾に詳しい。

まず、当時の中国における蹴鞠について伝えている書物として、『史記』が挙げられる。蘇秦列伝第九には「臨菑甚富而實。其民無不（略）六博踢鞠者」という記述がある⁽⁵⁾が、これは、臨菑という地に住む者はとても裕福な暮らしをしており、その住民に六博や蹴鞠をしない者はいない、という意味である。蹴鞠は裕福な暮らしをしている者たちの娯楽であったことがわかるだろう。

また氏は、「漢書」卷三十・芸文志第十に、兵書として『蹴鞠』二十五篇が記載されている」とも述べている。

「このことは「軍事訓練において蹴鞠が極めて重要視されていた」ということの大きな証拠となりうるものである。

中国の蹴鞠には、遊戯としての側面と、軍事訓練としての側面があつたということがわかる。

次に藩薈氏は、蹴鞠が規範化されていった過程として、唐代初期に成立した類書『芸文類聚』にある、「鞠城銘」

に着目している。以下にその本文を引用する（6）。

①園鞠方墻、彷彿陰陽。②法月衡対、二六相當。③建長立平、其列有常。④不以親疏、不有阿私。⑤端心平意、
莫怨其非。

（鞠城銘　『藝文類聚』）

藩薈氏は、この記述を以下のように解釈している。

①鞠が円形で競技場が壁に囲まれた方形であり、陰陽学の説く天円地方の宇宙観と一致する。

②蹴鞠をする者は2チームに分けて競技し、1チームが6人からなる。12人は一年の12ヶ月を表す。

③各チームに隊長がいて、ゲームの際には裁判がいた。共通のルールに則ってゲームが行われた。

④裁判は交際の疎密に左右されず、私心を捨てることが求められる。

⑤選手は平常心を保ち、負けても相手を怨まないことが求められる。(7)

日本の蹴鞠との相違点を考える上で見過ごすことができないのは、①の記述である。これは「園鞠方墻」の部分を訳した部分であるが、ここでは「墻」の字を「壁に囲まれた方形」と解釈している。『大漢和辞典』によると、「墻」は「かきね。ついだ、瓦石を疊み、或は柱を建てて板を張り、泥土を其の間に填めて家の周圍に繞らした

垣。又、門外から望むを遮ぎるために門内に設ける小さいかき」「さかひ。さへぎるもの」であることから、この解釈は妥当であるといえるだろう。

この一つの論拠だけで結論付けるのは少々不十分であるとも思われるが、中国蹴鞠において競技場を定めるものは樹ではなかつたということが推察できるだろう。

後述するが、日本の蹴鞠において「墻」の役割を果たすものは樹であった。これを懸かかりという。懸の存在が日本の蹴鞠にとっては非常に重要であり、それは樹との親和性を窺わせる蹴鞠の精霊とも大きく関わつてくると思われる。

第二節　中国における蹴鞠の神様

（二）で、中国と日本の蹴鞠の違いについて考える上でもう一つ重要な要素を考察したい。それは、蹴鞠の神様についてである。

先述した通り、日本における蹴鞠の精靈は、樹と大きな関連があると考えられる。これに関しては後に詳しく述べていきたい。本章では、中国における蹴鞠の神様について考える。

藩蓄氏は、「明代中後期に成立したとされる蹴鞠の専門書『蹴鞠譜』」を参考に、斎雲社という蹴鞠の同業者組合について解説している⁽⁸⁾。斎雲社では、「『清源妙道真君』（俗称二郎神）が蹴鞠業の神として崇められた」とされているようである。藩蓄氏の記述にもある通り、この「清源妙道真君」は、またの名を「二郎神」という。

この二郎神については、窪徳忠氏の『道教の神々』（講談社学術文庫、一九九六年）に詳しく取り上げられている⁽⁹⁾。本書によると、この神の由来は一、三の説がある。以下に、簡略にまとめる。

①『朱子語類』などにみえている李冰かその二男。李冰は治水と灌漑に尽力したため廟を造つて崇められたが、祟りがあつたため主尊を二男に変更した。

②隋の隱士の趙昱（煜）とする説。道教はこの説によつている。嘉州の河に住む蛟を退治したため、崇めら

れた。嘉州で河が洪水になりかけたときに、白馬に乗った二郎神が河を渡る姿が目撃されるなどの話も伝わる。

③『封神演義』の楊戩とする説。『西遊記』では孫悟空を捕える。

また、『世界人名辞典』⁽¹⁰⁾によると二郎神は、「中国で最もよく知られた武神の一人。（略）もと四川地方の水神であつたと考えられるが、その後全国に信仰が広がつた。水神であるため、龍退治の逸話もある」とされている。

これらの記述からも、清源妙道真君、すなわち二郎神は水と関係のある神であることが分かるだろう。また、武神という認識は登場する書物での活躍や、龍退治の逸話などから来ていると思われる。

では、なぜ水神である二郎神が、蹴鞠の神様として崇められたのであろうか。それは、蹴鞠がもつとされるもう一つの側面によるものだと稿者は考えている。すなわち、雨乞いとしての側面である。元塚敏彦『万葉けまり』について「飛鳥・奈良時代の蹴鞠再現に関する報告」には、「夏、殷王朝時代に雨乞いの神事として蹴鞠があつ

た」⁽¹¹⁾ という記述がある。また、中沢新一氏は、『精靈の王』（講談社、二〇〇三年）において、雨乞いの儀式としての蹴鞠について、もう少し詳しく論じている。「蹴鞠の場合は、人は地上にいて、鞠が空中に留まり続ける。（略）ちょうどよい中間の状態で、鞠は天と地の媒介を表現することになる。いつまでも雨が降らないのは、天と地の距離が離れすぎてしまって、宇宙のバランスが崩れてしまっているからだと考えた人々は、鞠を空中に蹴り上げる儀礼をおこなうことによって、天と地の間に媒介を挿入して、バランスを取り戻そうとした」とある⁽¹²⁾。これらの書物から、蹴鞠が雨乞いとしての側面をもつことがわかる。水に関係のある神である一郎神が蹴鞠と結びついているのは、雨乞いと蹴鞠の関係がルーツである可能性があるのでないか。

また、前述したとおり蹴鞠は『史記』などの軍事関係資料に登場するため、蹴鞠は軍事的訓練として認識されていたようである。このイメージが、武神である「清源妙道真君」と結びついている可能性もあるのではないか。いずれにせよ重要なのは、中国蹴鞠において神と崇められた清源妙道真君、すなわち一郎神は、日本のように樹とは全く関係のない神であるということである。

第一章では、競技場における樹の有無と、蹴鞠の神様の属性について調査を行った。この調査により、蹴鞠を

樹と結びつける思想は、やはり日本独自のものであると結論付けることができるだろう。すなわち、蹴鞠と樹の関係をさらに細かく分析することで、蹴鞠の精霊についての理解もさらに深まると考えられる。

次章では、日本に古くから存在する樹靈信仰について考察を加えていきたい。

第二章 樹靈信仰について

第一節 樹靈の存在

『今昔物語集』は、一二〇〇年以降に成立したと見られる仏教・世俗説話集である。全三十一巻から成っており、その収録話数の多さから、説話文学の集大成的存在であるといわれている。

そんな『今昔物語集』には、樹に宿る神の存在を指摘した説話が収録されている。本説話は、三善清行という宰相が、五条堀川のほとりに建つ怪異が起ころるという噂のある古家に渡り、そこで起ころる怪異に動じず最終的には妖怪を転住させることに成功する話である。清行がその古家に到着した際の、情景描写を以下に引用する。

庭ニ大キナル松、鶴冠木、桜、トキハ木ナド生タリ。木共皆久ク成テ、樹神モ住スベシ。

(『今昔物語集』卷第二十七 第三十一話 日本古典文学全集)

庭に大きな松、楓、桜、常緑樹などが生えている。樹は皆長い年月を生きてきたようなものばかりで、樹神も住んでいるようである、と解釈することが出来る。なお「樹神」には「コタマ」という読みがあてられている。

この説話によって、当時から日本では樹に神が宿るという観念があつたことがわかるだろう。その神の

」ことを「樹靈」という。

また樹靈について、『延喜式』に関連する記事が見える。

造遣唐使船一木靈并山神祭

（『延喜式』 虎尾俊哉編『延喜式 上』）

遣唐使の船を造る際に、「木靈」や「山神」を鎮めるために祭を行っていた、という内容が記されている。ここで樹靈を祭るのは、船の用材は樹であるためと思われる。このように、樹を伐採する際は樹靈や山神を祭るという慣習があつたようである。

樹靈を祭るというのは、そうしなかつた場合に、祟りなど人間にとつて不都合な事件が起ころる可能性があると

いうことである。この祟りはまさに、樹が伐採に反対するという意思を人間に示していると考えられる。このよう、樹が意思をもつていて描かれる説話はいくつか存在する。まずは、そのような説話について整理する。

第二節 意思をもつ樹

稿者は、樹がもつ意思是、その樹に依りついている樹靈の意思であると考えている。まずは『今昔物語集』から一つ説話を引用したい。

堂ヲ可起所ニ、当ニ生ケム世モ不知ズ古キ大ナル櫻有リ。（略）人ヲ以テ令伐ルニ、始モ斧鑄ヲ二三度許打立ル程ニ死シカバ、亦、此ノ度惶々寄テ令伐ル程ニ、亦、前ノ如ク我ニ死ヌ。（略）或ル僧ノ思ハク、「何ナレ

バ此ノ木ヲ伐ニハ人ハ死ル」ト、「構テ此事知ラバヤ」ト思テ、（略）木ノ本ニ窃ニ拔足ニ寄テ、木ノ空ノ傍ニ窃ニ居ヌ。夜半ニ成ル程ニ木ノ空ノ上ノ方ニ多ノ人ノ音聞ユ。聞ケバ云ナル様、「カクテ度々伐リニ寄来ル者ヲ不令伐シテ、皆蹴殺シツ。」サリトテ、遂ニキラヌヤウ有ラジ」ト云ヘバ、亦、異音シテ、「サリトモ、毎度ニコソ蹴殺サメ。世ニ命不惜ヌ者無ケレバ、寄來テ伐ラム者不有」ト云フ。（略）繩墨ヲ懸テ令伐ルニ、一人モ死ヌル者無シ。木漸ク傾ク程ニ、山鳥ノ大サノ程ナル鳥五六許、木末ヨリ飛立テ去ヌ。其後ニ木倒レヌ。皆伐リ揮テ御堂ノ壇ヲ築ク。其鳥共ハ南ナル山辺ニ居ヌ。天皇此由ヲ聞給テ、鳥ヲ哀テ忽ニ社ヲ造、其鳥ニ給フ。于今神ノ社ニテ有。竜海寺ノ南ナル所也。

（『今昔物語集』卷第十一 第二十二話 日本古典文学全集）

推古天皇の時代、鞍作鳥に造らせた釈迦像を安置するための堂を建てようとする所に「古キ大ナル槻」が生えていた。それを伐ろうとするも、次々と木こりが死んでしまう。原因を探ろうとした「或ル僧」は、真夜中にその

木の上に「多ノ人ノ音」を聞く。そこでは樹を伐ろうとした者を全員殺してやつたという内容と、ある特別な方法で伐られると祟りは起こらないという内容が語られていた。僧は聞いた内容を奏上し、無事に樹を伐ることに成功する、という話である。

僧の聞いた「多ノ人ノ音」は、樹靈の声であると思われる。樹靈が人間に對し、伐採に反対するという意思を示し、祟りを引き起こしていたのである。また、いざ樹が伐られるという時に、「山鳥ノ大サノ程ナル鳥五六許、木末ヨリ飛立テ去ヌ」という描写がなされている。この鳥こそが、樹靈が顯在化した姿である。樹靈が去つたことで、樹は晴れて伐られることになったと考えるのが自然だろう。また、「天皇此由ヲ聞給テ、鳥ヲ哀テ忽ニ社ヲ造、其鳥ニ給フ」という描写から、天皇がその鳥を樹靈であると認識していることが明らかである。樹靈の存在を示す有力な説話であると言えるだろう。

また鎌倉中期に成立したと考えられている仏教説話集である『沙石集』にも、樹がその意思を人間に示す説話を収録されている。

古木の大なるを、造営の為に、切りたりけるに、ある在家人に、神憑きて申しけるは、「我等は、この木をこそ、家とも憑みて栖むに、情けなく僧の切り給へる。浅猿く覺ゆるに、制し参らせてくれよ」と云ふ。「さらん僧にこそ、憑きも祟りもせめ、よその者を、かく責むべき様やはある」と云ひければ、「我等は、僧の袈裟の風にも当たり、陀羅尼の音をも聞きてこそ、苦患も助かる事なれば、僧をば、争か恼まし奉らん。ただかく申して伝へよ」と云ひければ、僧共聞きて切り残したり。

(『沙石集』卷第六ノ十三 新編日本古典文学全集)

ある寺の僧たちが寺の造営のために「古木の大なる」を伐ろうとした。すると「ある在家人」に「神憑」といって、「木を家と思つて住んでいるのに伐るのはやめて欲しい。伐採を制止してくれ」と人々に伝える。「僧に憑いて崇ればよいものを、どうして関係のない在家人に憑くのか」という人に対して神は、「私たちの苦しみは僧の袈裟

の風に当たつて陀羅尼の声を聞くことで、和らぐものなのだ。僧を困らせるわけにはいかないのだ」と答える。

僧たちはその言葉を聞き、伐採をとりやめた、というものである。

「ある在家人」に乗り移った神が樹靈であるということは、言うまでもないだろう。本説話でも、『今昔物語集』と同じく樹靈の意思を台詞として読み取ることができる。この樹靈は「木をこそ、家とも憑みて栖」んでいるのであり、その家を破壊しようとすると僧に対して反発していることがわかる。

また、樹の意思の変化という観点からみると本説話は非常に重要である。ここには「我等は、僧の袈裟の風にも当たり、陀羅尼の音をも聞きてこそ、苦患も助かる事なれば、僧をば、争か恼まし奉らん」という樹靈の台詞がある。樹が伐採を嫌がっていることには変わりないが、仏の使いである僧に対して「争か恼まし奉らん」と述べており、神が仏の下に位置づけられていることが読み取れる。このように樹靈に対する人々の認識は、時代背景に沿つて少しづつ変化していると思われる。

このように、時に言葉で、時に祟りという現象で樹の意思是人間に伝えられてきた。特に『沙石集』の説話にある「木をこそ、家とも憑みて栖む」という記述から、このように意思をもつているのは樹本体ではなく、樹に

依りついている神、すなわち樹靈であるということがいえそうである。

第三節 樹靈が依りつく「異形」の樹

第二節では、樹が意思をもつてているように描かれている説話から、当時の樹靈に対する認識に迫った。では、樹靈はどのような樹に依りつくのであろうか。

まず考えられる一つのキーワードとして、「巨樹・古樹」が挙げられるだろう。ここまで引用してきた樹靈譚には、それぞれ「木共皆久ク成テ」「古キ大ナル概」「古木の大なる」という記述が確認できる。このように古く、大きな樹を神聖視する考えは、現代にも通じていると思われる。御神木などが、その最たる例であろう。神崎宣武氏は『社をもたない神々』（角川選書、一二〇一九）で、「巨樹・巨木は、いいかえれば、老樹・老木である。その風姿が神々しい。そこには、若木と違った、強い生命力がある」と主張している⁽¹³⁾。この、「強い生命力」を人々は神聖視しているのである。

またもう一つ注目したいキーワードとして、牧野和春氏が提唱した言葉である「異形」を挙げたい。このキー
ワードは同氏の『巨樹の民俗学』（恒文社、一九八六年）に頻繁に登場する。異形の樹というのは、山口県の恩徳
寺にある結びイブキのように、曲がつたりうねつたりしている樹のことであり、牧野氏はこのような樹にも神が
宿ると信じられていたと述べる⁽¹⁴⁾。

樹は通常まっすぐ上に伸びるはずであるが、長い年月を超えて風雨などの自然現象にさらされることで、曲が
りくねるのである。つまり異形という概念は、先ほども挙げた巨樹・古樹にも通じるものであると考えられる。

『海道記』は一二二三年に成立したと考えられている紀行文である。この『海道記』に、曲がった異形の樹を
神聖視する記述が確認できる。

見れば又、山に曲木あり、庭に怪石あり、地形の勝れたる、仙室と云ひつべし。

（『海道記』
新編日本古典文学全集）

「仙室」とは読んで字のごとく、仙人が住むような場所のことである。ここでは仙人は神と同じような捉え方をしてよいだろう。そのような「仙室」の一つの要素として、「曲木」が挙げられている。この一つの例のみで結論づけるのはやや早計ではあるが、異形の樹はやはり、当時から神聖視の対象だったといえるだろう。

ところで牧野氏は、この異形という言葉を樹の形にのみ着目して提唱している。つまり曲がつたりうねつたりしている樹のことである。ただこの定義のみでは、樹靈の依りつく樹を全て言い表すことは不可能であると感じる。後に紹介する「不成の樹」などといった神聖な樹も存在しているためである。よつて本稿では、この異形という言葉をもう少し広義に捉えたいと思う。

稿者は、樹靈が依りつく「異形」⁽¹⁵⁾の樹は「人間の理解の範疇を超えたもの」であると考えている。通常まつすぐ上に伸びるはずの樹木が曲がつて生長することは、人間の通常の理解を超えている。だからこそ、そのような樹を神聖視し崇めてきたのである。この定義をあてはめて考えてみると、人間よりもはるかに長く生き、はる

かに大きく生長した樹も「異形」である。よつて広義には、巨樹・古樹も「異形」なのである。

さてここで、先述した「不成の樹」について取り上げたい。「不成の樹」とは実の成らない樹のことであるが、これも当時神聖視されていたようである。『今昔物語集』には、この「不成の樹」が登場する説話が二話収録されている。

今昔、延喜ノ天皇ノ御代ニ、五条ノ道祖神ノ在マス所ニ、大キナル不成ヌ柿ノ木有ケリ、其ノ柿ノ木ノ上ニ、俄ニ仏現ハレ給フ事有ケリ。微妙キ光ヲ放チ、様々ノ花ナドヲ令降メナドシテ、極テ貴カリケレバ、京中ノ上中下ノ人詣集ル事無限シ。（略）其時ニ、光ノ大臣ト云フ人有リ。深草ノ天皇ノ御子也。身ノ才賢ク、智明力也ケル人ニテ、此ノ仏ノ現ジ給フ事ヲ、頗ル不心得ズ思ヒ給ケリ。「実ノ仏ノ此ク俄ニ木ノ末ニ可出給キ様無シ。此ハ天狗ナドノ所為ニコソ有メレ。（略）」忽ニ大キナル屎鷄ノ翼折タルニ成テ、木ノ上ヨリ土ニ落テ（略）小童部寄テ、彼ノ屎鷄ヲバ打殺シテケリ。

延喜天皇の時代、「大キナル不成ヌ柿ノ木」の上に突如、仏が現れる。人々はその仏を尊く思い拝んでいたが、「光ノ大臣」だけは、本物の仏がこのように木の上に現れるはずもないでおそらく天狗などが化けているのだろうと思い、この仏をじつと見つめる。すると術は解け、仏は「大キナル屎鷄ノ翼折タル」に変化し、子どもたちに蹴り殺されてしまう、という説話である。

天狗の失敗譚として捉えられる本話であるが、この事件の起ころる場面として「大キナル不成ヌ柿ノ木」が設定されていることは重要であるといえるだろう。「光ノ大臣」こそ見破ることができたものの、多くの人々は天狗にだまされていた。すなわちそれは、「大キナル不成ヌ柿ノ木」には仏が現れてもおかしくないという認識が当時あつたということである。本説話から「不成の樹」に対する当時の人々の神聖視が見て取れるだろう。

『今昔物語集』に収録されているもう一つの「不成の樹」譚も、不思議な出来事の背景として「不成の樹」が

用いられている。

今昔、七月許ニ大和ノ国ヨリ、多ノ馬共瓜ヲ負セ烈テ、下衆共多ク京ヘ上ケルニ、宇治ノ北ニ、不成ヌ柿ノ木ト云フ木有リ、其ノ木ノ下ノ木影ニ、此ノ下衆共皆留リ居テ、瓜ノ籠共ヲモ皆馬ヨリ下シナドシテ、息居テ冷ケル程ニ、私ニ此ノ下衆共ノ具シタリケル瓜共ノ有ケルヲ、少々取出テ切り食ナドシケルニ、其辺ニ有ケル者ニヤ有ラム、年極ク老タル翁ノ、帷ニ中ヲ結ヒテ、平足駄ヲ履テ、杖ヲ突テ出来テ、此ノ瓜食フ下衆共ノ傍ニ居テ、力弱氣ニ扇打仕ヒテ、此ノ瓜食フマモラヒ居タリ。（略）亦変化ノ者ナドニテモヤ有ケム。其ノ後チ其ノ翁ヲ遂ニ誰人ト不知デ止ニケリ、トナム語リ伝ヘタルト也。

（『今昔物語集』卷第一十八 第四十話 日本古典文学全集）

「不成ヌ柿ノ木」の木陰で休む下衆共の前に、「年極ク老タル翁」が現れる場面。下衆共が翁に瓜を分け与えなかつたため、翁の幻術によつて瓜を全て奪われる（この場面は長くなるので省略した）という話である。ここでは、最後にまとめとして、翁のことを「変化ノ者ナドニテモヤ有ケム」と分析する文章が挿入されている。加えて、その後翁の行方を知る者は誰一人としていなかつたという。

本話も現実ではあり得ないような不思議な話であるが、「変化ノ者」と称される摩訶不思議な翁が登場する場所として、「不成ヌ柿ノ木」が選ばれているのである。

ここまでからわかるように、「不成の樹」は、前者においては神聖視された樹、後者においては不思議な事件の起ころる場所、として捉えられている。人間にとつて異質な存在である、という点では神や仏も「変化ノ者」も同じである。このように「不成の樹」には人間とは異質の存在が依りつく境界的な側面がある、という認識があつたといえるだろう。

そもそも、実の成らない樹には神が依りつくという観念が『萬葉集』の時代からあつたであろうことは、盛本昌広氏や川端善明氏などの先行研究によつて指摘されている⁽¹⁶⁾。その根拠は、「玉葛実成らぬ木にはちはやぶる

神そつくといふならぬ木ごとに（巻一・一〇一）」という歌（『萬葉集』 新編日本古典文学全集）である。この歌は、大伴宿祢が巨勢郎女に求婚した際に詠んだ相聞歌である。現代語訳すると、「玉鬘のように実のならない木には荒々しい神がつくといいます。実のならない木ごとに」となる。

ここで先ほどの「異形」の話に戻ると、「不成の樹」も人間の理解の範疇を超えたものであるといえる。通常、実の成る種類の樹には当然実が成るものである。しかしその樹に実が成らない、というのは明らかに人間の理解を超えていて、だからこそ人間を超えた存在、神の依りつくものと考えられたのが「不成の樹」のルーツであると考えている。だからこそ人間を超えた存在、神の依りつくものと考えられたのが「不成の樹」のルーツであると考えるのが、自然ではないか。よって、「不成の樹」も「異形」の一つであると考えられる。

ここまで、意思をもつ樹や「異形」の樹という観点から、日本に古くから存在する樹靈信仰について考察してきた。祟りなどによって人間に意思を示す樹は、樹靈の存在が前提となっている。またその樹靈は、巨樹・老樹や「不成の木」などの「異形」の樹につくものであるということができるのではないか。

第三章 跛鞠の精靈と樹靈の関係

第一節 懸という存在

第一章にて、跛鞠と樹を結びつけるのは日本独自のものである可能性を指摘した。また第二章では日本に古くから存在する樹靈信仰についての考察を行った。この樹靈という観念が跛鞠にどのように影響を与えているのかを本章で考察していきたい。そのためにはまず、日本の跛鞠を特徴づけている懸について明らかにしておく必要があるだろう。

日本の跛鞠を特色づけている一つの要因として、樹との関わりがあるというのは、ここまで考察からも明らかである。そこで跛鞠と樹について考える上で重要な要素となってくると思われるのが、懸という存在である。懸とは、跛鞠をするための場所やその場所を囲うように植えられた樹のことを指す。跛鞠をするための場所は、

「鞠庭」とも呼ばれる（本論文では混乱を防ぐため、蹴鞠をする場所のことを「鞠庭」、鞠庭を形作るために植えられる樹のことを「懸」と表記することとする）。つまり、蹴鞠は鞠庭というコートの中、すなわち懸の内側で行われることになる。これに関連して、冒頭に引用した『古今著聞集』の説話にはこのような記述がある。

まりを好みてのち、かかりの下に立つ事七千日

（『古今著聞集』 卷第十一 四一〇 新潮日本古典集成）

藤原成通が蹴鞠を好み、懸の下に立ち（蹴鞠を行い）七千日が経った、という内容である。この記述から当時、蹴鞠を行うことを「懸の下に立つ」と表現することもあったとわかる。

懸については、様々な蹴鞠書に記されている。懸として植えられる樹の種類は、一般的に桜・柳・楓・松であ

る。そしてそれぞれの樹は、春夏秋冬と対応している。このことは一一八六年に成立したと考えられている蹴鞠書『革菊要略集』にも記されている。

兼ハ又以テ四本ノ木ヲ一當ツ二四行ニ、故ニ可シレ司^{ツカサトル}ニ四季ニ、(略) 所謂ユル櫻者春木ナル(略) 以テ柳ヲ属スルカ
レ夏ニ(略) 鶴冠木ハ秋木ナルカ(略)、松摄^{シテ}レ冬(略)

(『革菊要略集』 渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』)

また現存する多くの蹴鞠書を参照すると、それぞれの書物で多少の違いはあるものの、四本の樹を植える方角も定められていたようである。

ところで、この懸がいつから植えられるようになったかは定かではない。ただし、平安時代を初めとする物語

には多く懸についての記述が確認できる。まずは、第一章で少し触れた『うつほ物語』を引用したい。桂の別邸に集まつた仲忠や近澄たちが蹴鞠に興じる場面である。

「をかしき鞠の懸かりかな」と、興あるまで鞠遊ばす。

(『うつほ物語』国譲 中 新編日本古典文学全集)

「をかしき鞠の懸かり」という台詞から、懸の木の美しさが強調されている。ここでは樹の種類は不明である。また、たまたま桂邸に植えられていた樹のことを「鞠の懸かり」と呼んでいるのか、鞠庭のために樹が植えられていたのかどうかも、この場面からは不明である。ただ、懸の下で蹴鞠を行つたという記述がここでは重要であるといえるだろう。

また、次に引用するのは『源氏物語』である。ここでも、懸についての記述が確認出来る。

人々あまたして鞠もてあそばして見たまふと聞こしめして、（略）大将も督の君も、みな下りたまひて、えな
らぬ花の蔭にさまよひたまふ夕映えいときよげなり。（略）ゆゑある庭の木立のいたく霞みこめたるに、色々
紐ときわたる花の木ども、わづかなる萌木の蔭に

（『源氏物語』若菜 上 新編日本古典文学全集）

夕霧が人々に蹴鞠をさせているという話を聞いた源氏たちが、その人々を寝殿に呼ぶ。そこには見事な桜や若芽
のふく木があり、その下で人々は蹴鞠に興じるという場面である。本場面には「懸」という言葉が直接出てきて
はいない。しかしながら、傍線を付した「花の木ども、わづかなる萌木の蔭」で蹴鞠をしているという記述から、

この蹴鞠が「花の木」「萌木」を懸として行われていることが想像できるだろう。『うつほ物語』との相違点として挙げられるのは、『源氏物語』では懸として「花の木」すなわち桜が登場している点であろう。懸に用いられるべき樹の種類が段々と定められ始めている時であると思われる。また、本場面では蹴鞠の良し悪しよりも景色、すなわち懸として植えられている樹の風情に重点を置いて描かれているところが特徴的である。

また最後に、少し時代は下るが、鎌倉時代中後期に成立したとみられている日記である『とはずがたり』を引用する。

新院御幸あるべしと申さる。懸り御覽ぜらるべしとて、御鞠あるべしとてあれば

(『とはずがたり』卷二 新編日本古典文学全集)

亀山院が、御所に御幸したいとの申し出をする。その際亀山院は懸を御覧になるだらうということで、ついでに蹴鞠も行おうということになった、という場面である。ここで注目したいのは、主目的が蹴鞠ではなく、懸の見物であるということである。

ここまで、懸が登場する物語を引用してきた。ここからも分かるとおり、蹴鞠が描かれる際には懸についての記述があることが多いのである。懸が蹴鞠にとって重要な要素であったことがわかるだろう。

『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』では、「懸は鞠場に必須の装置であった」⁽¹⁷⁾と述べられる。「鞠場」は「鞠庭」と同義である。懸が無ければ鞠庭は形成されない。よって必須の装置といつても過言ではないだろう。また本書では、懸の機能として「障害物あるいはクッショーンとしてこれ（＝懸）を機能させることによつて、蹴鞠を技術的により変化に富んだ、複雑なものにし、面白さを増幅」させる点を挙げている⁽¹⁸⁾。

このように蹴鞠にとって、懸はなくてはならない存在である。ここで蹴鞠の精霊について話を戻したい。蹴鞠の精霊が樹と大きく関係しているということは、先に述べたとおりである。ここまで整理と考察に従うと、蹴鞠の精霊が大きく関係すると思われる樹は、懸のことであると考えられる。

では、蹴鞠の精靈は一体どのような性質をもつてているのであろうか。

第二節 蹴鞠の精靈と樹

蹴鞠の精靈が樹と大きく関係している可能性は、「はじめに」の部分で指摘したとおりである。ここで本稿の一番初めに引用した、『古今著聞集』の説話にもう一度戻りたい。

本説話の中で蹴鞠の精靈は、蹴鞠が行われる際に懸を伝つて鞠に乗り移ると話している。一方普段は、「柳しげき林、きよき所の木」に住んでいるという。つまり蹴鞠の精靈は、常にその精靈としての役割を果たしているわけではなく、蹴鞠がある時のみ、「木つたひ参りて」「御鞠に付」くことでの靈験（「御まもりとなりまゐらせて、御鞠をもいよいよくなしまゐら」ということ）を發揮するのである。

蹴鞠の「御まもり」である精靈なら、常に鞠に憑いていてもおかしくはない。それがなぜ、普段は樹に住んでいるのであろうか。まずはこの問題を検討することで、蹴鞠の精靈の正体について迫りたい。

蹴鞠の精霊を考察する上で無視することができないのは、『成通卿口伝日記』である。「成通卿」とは、当時「鞠聖」「鞠神」とも称された藤原成通（一〇九七～没年不明）のことである。井上宗雄氏の『平安後期歌人伝の研究』（笠間書院、一九七八年）によると、成通は「平安末期において才芸豊かな公卿として有名」であった。特に「鞠・今様・笛・馬に巧み」であつたとの記述が確認できる¹⁹。

『成通卿口伝日記』は成立年がはつきりしない書物であり、作者も未成立である。村戸弥生氏は『遊戯から芸道へ—日本中世における芸能の変容』（玉川大学出版部、一〇〇二年）において本書の成立を「一一八二～八四年頃成立か」としている²⁰。『成通卿口伝日記』は、そんな藤原成通による技術的な口伝と、彼にまつわる蹴鞠説話をまとめたような構成をとっている。また本書の冒頭には、『古今著聞集』と同じ蹴鞠の精霊説話が収録されている。『古今著聞集』説話には、「かの口伝に侍るは」という挿入句があるため、『成通卿口伝日記』の説話を『古今著聞集』が参考にしたということがわかるだろう。

そんな『成通卿口伝日記』であるが、蹴鞠の精霊について考える上で非常に重要な項目がある。それは、本書中盤にて述べられている「本木切立を鞠にしてしる事」の項である。該当箇所のみ引用する。

木は鞠を思ふ。まりは木を思ふ。切立はまたく鞠をおもはず。木の性なきが故也。

(『成通卿口伝日記』 新校羣書類聚)

木は鞠を思う。鞠は木を思う。切立は全く鞠を思わない。(切立には)木の精靈がいないからである、という内容である。切立とは、根を切り取った木のことである。主に臨時の蹴鞠を行う際に使用されていたとされている。この記述は項目の導入文に過ぎず、実際は樹の近くで鞠を蹴り上げると、自分がだけがその親和性を感じ取り、木か切立かを言い当てることができる、という成通の能力を示す内容が主題となっている。

蹴鞠の精靈は、「木はなれたる宮仕へは術なき事」と述べているが、その理由はこの「木は鞠を思ふ。まりは木を思ふ。」に集約されるといえるのではないだろうか。樹と鞠は互いに思い合っているため、鞠庭に樹、すなわち

懸がある場合には、その樹を媒介として精靈が「御鞠に付」くのである。

また「切立はまたく鞠をおもはず」という記述にも注目したい。その理由は述べられているように「木の性なきが故」である。これらの記述から、「鞠を思」つてているのは「木の性」であるということがいえよう。「木の性」は「鞠の性」と同じように解釈すると「木の精靈」つまり樹靈である。樹に依りついている樹靈こそが、蹴鞠を思い、恩恵をもたらしているのである。

この『成通卿口伝日記』の記述から、蹴鞠の精靈の正体は樹靈であると結論づけられる。彼らが鞠に常駐していないのは、元々が樹靈であるためだと考えられるだろう。蹴鞠を感じた時に、樹靈は懸を伝つて鞠に依りつき、蹴鞠の精靈としての靈験を發揮するのである。

第三節 蹴鞠の精靈と柳について

前節において、蹴鞠の精靈は樹靈と同義であると結論づけた。その蹴鞠の精靈が登場する説話を並べると、あ

る共通点が浮かび上がる。それは、柳との関係性である。『古今著聞集』では蹴鞠の精靈は「柳しげき林、きよき所の木に栖み候ふ」と述べている。また『十訓抄』に登場する蹴鞠の精靈は、「懸りの柳の枝にあらはれ」るのである。

本章第一節でも述べたとおり、一般的に懸として用いられるのは桜・柳・楓・松の四つであり、それらは特に優劣はないようである。したがって、これらの説話の中で特に柳が強調して描写されているのは、蹴鞠の精靈と柳に何か特別な関わりがあるといえるだろう。

この問題をまず、柳の懸としての特徴という観点から考えてみたい。ここで『蹴鞠簡要抄』を参照する。本書も『成通卿口伝日記』と同じく成立年代や著者が未詳である。『蹴鞠の研究』においては、難波宗長（難波家は、藤原頼輔に始まつたといわれている蹴鞠道家の一つである）の著作と推定されており、蹴鞠草創期の書物であると考えられている⁽²¹⁾。作中には「口傳集云」という出典注記が登場するが、これは『成通卿口伝日記』のことであると考えられるため、少なくともそれよりは後の蹴鞠書であると思われる。本書には「柳かゝりの事」という項目がある。

八條冠者光親云。鞠をつよくかくべし。柳はやはらかにて、鞠をとをくはねぬなりと云々。

（『蹴鞠簡要抄』 新校羣書類聚）

鞠は強く蹴るべきである。柳は軟らかい樹なので、（当たると）鞠は遠くまで跳ねないので、という内容である。

柳が軟らかい、というのは柳特有の垂れた枝のことを述べていると思われる。本章第一節でも引用した『源氏物語』には柳について、「柳もいたうしだりて、築地もさはらねば乱れ伏したり」という記述があり（²²）、当時も枝垂れ柳が一般的であったであろうことが推察される。これが『蹴鞠の研究』でも述べられている「障害物あるいはクッショーン」としての機能であったと考えられる（²³）。

ただし、『蹴鞠簡要抄』には柳についての項目の後、楓についての項目もある。そこでは楓について「えだこは

くして、まりにしなはず。強くあたればことにとをくはぬ」という説明がなされている。楓は固い枝を持つため、鞠を遠くまで跳ねさせるのである。『蹴鞠の研究』の作者の一人である渡辺融氏の論文⁽²⁴⁾では、「スポーツ技術的に見ると、蹴鞠における懸とは、鞠場の単なる雅びやかな装飾品ではなく、蹴鞠をより技術的に複雑、高度なスポーツにするための装置だったのだ」と分析されている。これは『蹴鞠の研究』における「障害物あるいはクッショーン」としての機能に通じる論である。この論を踏まえて考えると、蹴鞠を遠くに跳ねさせてしまう楓にも蹴鞠の高度化という点で利点があるのである。よって、柳だけが特別「障害物あるいはクッショーン」としての機能を有する訳ではないと思われる。

そこで、本稿の根幹を成している樹靈という観点から、蹴鞠の精靈と柳の関係性について考えてみたい。『成通卿口伝日記』「本木切立を鞠にしてしる事」の項には、切立という言葉がある。これは先述したとおり、根を切り取った木のことである。本木（本物の樹）と切立の一番の違いは、根の有無であることから、根の無い切立には樹靈が依りつかないということがわかる。これは第二章で扱った樹靈の依りつく樹が、地面上に根付いた本木であり、伐られる（すなわち切立になる）ことに反対しているということからも明らかだろう。

そこで考えたいのは、柳の根についてである。柳の根について述べた蹴鞠書として、『内外三時抄』を参照する。

『内外三時抄』とは、飛鳥井雅有（飛鳥井家は、藤原頼輔を祖とする鎌倉時代最大の蹴鞠道家である）によつて一二九一年前後に著されたとされている蹴鞠書である。全四編、五十六箇条という分量を誇つており、当時の蹴鞠を考える上で非常に重要な書物といえる。この『内外三時抄』の第一篇ともいえる「鞠場篇」の「懸樹」の箇所に、柳に関するこのような説明が見える。

又〇⁽²⁵⁾（云）、有根本「切立」⁽²⁶⁾交植ハ、柳は不依根之有無、生付木也

（『内外三時抄』 渡辺融・桑山浩然『蹴鞠の研究 公家鞠の成立』）

根のある樹と切立とを交ぜて植えると、柳は根の有無に関係なくそこに生えつく樹であるのだ、という記述であ

る。この説明から、柳は切立であつても、その場に根付いてしまうほどの生命力をもつた樹であるということがわかるだろう。

柳は、たとえ切立であつても植えると根が生えて本木になる。本木になれば再び樹靈は寄りつくことができるるのである。その他の三種類の樹には、このような特徴が確認出来なかつた。つまりこの性質は柳独自のものといえるだろう。

たとえ切立であつても根を生やす強い生命力という柳の特徴が、根と深い関係のある樹靈と強く結びつき、結果として蹴鞠の精靈と特別な関係があるとされているのではないだろうか。

おわりに

本稿では、成通卿説話に登場する蹴鞠の精靈について考察を行つた。まず第一章では、元祖である中国の蹴鞠について整理し、蹴鞠と樹を結びつけるのは日本独自の観念であるということを指摘した。ついで第二章では、日本に古くから存在する樹靈という観念について、説話集などから考察を行つた。その結果、人間は自らの理解の範疇を超えた生き物である樹を神聖化していることがわかつた。そして第三章では、第二章で明らかにした樹靈の存在を踏まえつつ、藤原成通の前に現われる蹴鞠の精靈が樹靈であると結論付けた。そして最後に、彼らが特に柳と強い関係をもつてゐるのは、柳の根を生やす強い生命力という特徴が影響を与えてゐる可能性を指摘した。

蹴鞠は当時の人々にとっての大切な娯楽であった。そしてその娯楽は、公家鞠として整備されて次第に故実化し、多くの蹴鞠書を生むこととなる。その蹴鞠書は現代まで多く保存され、当時の生活や思想を知るうえで大きな手掛かりとなつてゐると言えるだろう。蹴鞠の故実についての研究は多くなされており、現在は当時の蹴鞠を

再現する取り組みも行なわれているようである。

そんな中、蹴鞠の精霊についての深い研究は今まであまりなされてこなかった。特に第三章で考察したような、樹靈との関わりという観点は先行研究はない。蹴鞠の精霊の正体は、日本人が古くから信仰してきた樹靈である。彼らにそのような「設定」が施されたのは、第三章第一節で明らかにしたような「懸」という日本蹴鞠独自の文化が関係しているものと思われる。

蹴鞠の精霊は、藤原成通の前にのみ現われる。それは、成通こそが蹴鞠道の祖であり蹴鞠に強い想いをもつていたからであると考えられる。その想いが蹴鞠の精霊に届き、彼らが成通を認めたことでその加護を受ける。これにより藤原成通は蹴鞠の精霊に守られた「鞠聖」となるのである。

本稿も不十分ながら、蹴鞠の精霊という存在を理解するうえで、今までにはなかつた見方を加えることができたのではないかと考えている。

注

(1)引用部分の傍線部は筆者による。以下これに同じ。

(2)池修氏は『日本の蹴鞠』（光村推古書院、一〇一四年）において、蹴鞠の精霊を蹴鞠の神様と言われている「精大明神」と関連付けて論じようとしている。しかし精霊と神様の間にイコールの関係が成り立つかどうかは疑問である。また池氏本人が考察の結果「理解することは容易ではありません」と結論付けてしまっている。

尾形弘紀氏は論文「蹴鞠の哲学、または地を這う貴族たち—院政期精神史のひとつの試み（三）—」において、蹴鞠の精霊説話は藤原成通の「双面神たる彼の相貌の荒らぶる一面の方」を表わすものであるとしている。蹴鞠には上臍（長閑な蹴鞠）と下臍（アクロバティックな蹴鞠）の二種類があり、成通はどちらかというと上臍的鞠足であった。しかしこの蹴鞠の精霊説話が収録された『古今著聞集』などでは、その

後下臍的鞠足の側面を見せる成通の説話が続く。つまり蹴鞠の精靈は、成通の下臍的側面を支えるものであるとしているのである。

(3)『蹴鞠の研究 公家鞠の研究』では、本説話について「()」の説話は一つには懸が當時蹴鞠に必須の装置と考えられていたことを物語つてゐるといえるであろう」として いる。

(4) 潘蓄「古代における中日文化交流の一側面—蹴鞠文化を中心にして」『国際学研究』八、一〇一七年

(5)『史記 新書漢文大系』明治書院、一〇〇一年

(6) 藩蓄氏の論文の記述に合わせて、引用部分に①～⑤の通し番号を付した。

(7) 前掲論文、注4、二〇～二一頁

(8) 前掲論文、注4、二一頁

(9) 一二四二～一二四五頁

(10) ジャパンナレッジ (<https://japanknowledge.com/>) 参照

(11) 元塚敏彦「『万葉けまり』について—飛鳥・奈良時代の蹴鞠再現に関する報告—」『皇學館大学教育学部研

究報告集』三、二〇一一年

(12) 九頁

(13) 一四二頁

(14) 六七〇七七頁

(15) 本論文では、牧野氏の提唱している樹の形に着目した定義を異形、私なりの定義である人間の理解の範疇を超えた樹を「異形」と鉤括弧を付して記すこととする。

(16) 盛本昌広氏は『草と木が語る日本の中世』(岩波書店、二〇一二年)において、『今昔物語集』における「不成の樹」譚は、「不成の木に神が出現するという認識を前提として作られたもので、神の代わりに天狗や翁が現れて人をだましている」としている。また、「不成の樹」になぜ神が憑くのかということに関しては不明であるとしている。また、川端善明氏は『影と花 説話の径を』(笠間書院、二〇一八年)でこの神聖な樹に対して「様々な意味での境の地の、一つのシンボル」であるとの考察を加えている。また、「木々のなかで柿の木は一つの聖樹であった。魂がその木に懸かると信じられ、魂祭りには欠かせぬ木であった。」と

述べている。

(17) 一二二頁

(18) 一四頁

(19) 二二六頁

(20) 六六頁

(21) 一三九頁

(22) 『源氏物語』蓬生 新編日本古典文学全集

(23) 注18を参照

(24) 渡辺融「懸りの木に関するスポーツ史的考察・中世の蹴鞠書から」『スポーツ史研究』三、一九九九年

(25) 引用元である『蹴鞠の研究』の凡例では以下のように説明されている。

「補入は、底本に倣い、補入すべき場所に挿入符「○」を付し、補入すべき文字を行間に記した。」

(26) 割注については、表記の都合上〔 〕で示した。